
君に永遠の愛を - 人形師 源十郎 -

” 太った猫 ”

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

君に永遠の愛を - 人形師 源十郎 -

【Nコード】

N4465C

【作者名】

” 太った猫 ”

【あらすじ】

今回のヒロインは人造人間小夜子^{リビング・デッド}

君に永遠の愛を - 人形師 源十郎 -

プロローグ（前書き）

CAUTION!

これは決して死者を冒瀆するお話ではありません。

プロローグ

目覚めると、そこはゴミ置き場だった。そういえば今日は一月曜日（生ゴミ）の日だったなあと、のほほんと彼女は考えた。

- 某月某日某所での会話 -

「間違い、ないのだな」

光さえもどこかに吸い込まれてしまったような薄暗いその部屋で、その部屋の主とおぼしき一人の老人がぬめりと呟いた。

「はい、確かです」

目の前の男は表面上は老人の妖怪じみた眼光を真正面から受けとめると、それだけを端的に言った。

「そうか、…それで」

「現在、確保に三人ほど向かわせております」

老人の言わんと欲することを正確にくみ取ると男は答えた。

「…」用は終わったといわんばかりに、老人はとさり、と豪華なベツドに横たわった。

「それでは、」

「…、わかっているな」

「私は、不老不死などというものに価値を見いだせません」

背中にかけられた声に男は迷いもなく答えた。

「世にこれほどの悲願はあるまいよ」

「時は、うつろいやすいものです」

「…、人の心もな」

しばしの沈黙が二人の間に舞い降りた。

「…、行け」

「仰せのままに」

- 人造人間現る -

その日 能登 源十郎は不意に足首をつかまれた。

結果、彼は焼けつけるようなアスファルトの地面と不本意なる接吻を交わすはめにおちいった。

「あうううー、お願いですからあ、お、お おちついててくださいあ
ああいー、なにがあっても起こってもびっくりしたりしないで
くださいー、ヒック、悲鳴なんかとかもあげないでくださると素
敵ですー、ウ、エッグ、気絶とかもしないでくださいー、お
願いで頼みますから一生逃げないでいてくださいー。ううう、
生卵なんかとかもぶつけないでくださるとおありがとうございます
ですー、おねがいしますですー、ううううう……」

腐った肉の匂いを漂わせる、死んだ魚のような目をした女。

それが自分を地面に転がした女性に対して抱（いだ）いた一能登
源十郎の第一印象だった。

日本人形のように短めに切りそろえられたおかつぱ頭に、緑色の
カチューシャをのせ、上半身だけで冗談のように転がっているメイ
ド服の女。それが彼女を観察した結果 抱いた彼の彼女に対する結
論であった。

「あうううつ、お願いして頼んでみますから気絶しないで下さあ
いよおおーっ」どうやら呑気に彼女を観察する源十郎が目を
開けたまま気絶したものだと思ったらしい。まあ、活きのよい内臓
を飛び跳ねさせながらすりついてくる生きている死体なんぞと、
その肉体の発する腐臭とともにご対面した日にや、すみやかに現実
逃避を決め込むのが、まっとうな人間としてとるべき態度ではあつ
たろう。が、彼 人形師 能登 源十郎はいささかまっとうな人間

君に永遠の愛を - 人形師 源十郎 -

の集合から、はみ出しぎみと言われていた。

人造人間現る その2

「で、なんの用なんだ」

「うつつ、だから警察なんて呼ばないでくださあいつてばあ、うつつ、これは死体遺棄事件とかじゃあ、内容の示す微細な事実とはもかく、ないんですってばあー」

「だから、何の用だといっている」

能登 源十郎は片方の足を彼女の胴体から離れたらしい両腕に握りしめあられたまま、地面の上にとつかとあぐらをかくと頬杖をつきつつ彼女にかまってやることにした。

「うつつ、おねがいですから逃げないで私の話を聞いて下さいってばあ、落ち着いてわだちのはなじをぎいでくだつ、

す、ぱかんつつ！

「名前は」最初に戻って再び懇願と嘆願を続けそうな彼女のドタマをはたいたばかりのゴムソウリを持った男が、そいつで肩をトントンと投げやりげに叩きながら不愛想に彼女に向かってそう言っているのに ようやく彼女は気がついた。

「あうあうつつ？」

「で、あうあうさんがなんの用なんだ」

「えーっと、驚いたり騒いだりとか気絶したりとか、そーいうのやつたりとかはしないんですか？」

「…、肝試しとかいうのならよそでやってくれ」

「ああつ、ごめんなさいいつ、待ってて下さい。置いていかないで下さいってば、見捨てないでやって下さああい。ここであなたに見捨てられたならとても私も私が困るんですうう」

「それで、あうあうさんが何の用なんだ」
「ううっ、あうあうさんじゃなくて小夜子こよこさんなんです。話を聞いてくれてありがとうございます、ううっ、朝っぱらからずーっとずーっと声かける人達に驚かれたり気味悪がられたり警察ざたになりかけたり、そのほかいろいろとなんやらかんやらでとても困っていたところなんですー、…ところでお兄さんの足のところの私の両腕うで返じでください、このまんま腕がもげたまんまだと這いずるところなんですー、ううっ、でも私、わたし博士に捨てられたなのだから両腕うでを返してもらってもくっつけられないです。ううっ……」

人造人間現る その3

「で、博士っていうは」

「うっうっうっ、私、私 博士に捨てられたんです、交通事故にあわれて五体がバラバラになったところの最愛の彼女をツギハギして生きかえらせてみれば、あーら不思議、できあがったものは生前まえの記憶のズツポ抜けたあたしみたいな脳ミソスカタン女になったんです。できるときつと絶望してしまわれたんです、うっうっうっ。わたし、どうしようがど思つてとりあえず誰かに人生相談しようかと思つたんですけど考えてみたら私、博士しか知らないんです。でもってかたっぱしから道を歩いているお方々に声をかけてみていたんですけど、なんか途中から相談料とかなんだかとかいいうお話になってきてお金を払えと言われたんですけど、私 お金なんか持つてなくてえ、うっうっ、じゃあ身体でつて言うことになつたんですけど、私、やめて下さいって言ったんですけど、無理矢理服脱がされたりしたものですから、うっうっ、身体のパーツがはずれちゃって、ひどいですよね、私を置いて逃げ出して。まったく、まだ相談事も聞いてもらつてないのにいい、それに散らかしたら元に戻るのが常識つていうもんです。それでしかたがないからなんとか自分で元に戻そうとしたのですけれど身体からだの下半身を支えているところの服がボロボロになつていて、しょうがないから上半身うへみだけで這いずりまわりながら声をかけて、ようやくとあなたに話を聞いてもらえたなど、そういうわけなんです。うっうっ。これでああなたにまで両腕りょうでんを持っていかれたまま見捨てられたりしたのなら今度こそは口を使つてでもすがりついて呼びとめなくてはならなくなるところでした。でもでもっ、口を使つてしまいますと話しかけられなくなるのですし、今度は首がもげてしまいますです、どうしましょう」

「で、結局なんの用なんだ」

まあ、確かに彼 能登 源十郎といえども生首に必死の形相で足元にくらいつかれたなら問答無用で踏みつぶすかも知れないか、とか思いつつ、彼はとりあえず 辛抱強く同じセリフを繰り返す事にした。

「うつつ、とりあえず私を修繕して欲しいのですけど。無理ですよねえ。だからとりあえずは私の残りのパーツを集めて下さいいつ。うつつ、今朝方目が覚めたら生ゴミ置き場にいてですね、寝ぼけたのかなあとか思ってお家に帰ったら置き手紙があつてですね、それには

『僕はもう疲れたよ、すまないが探さないでくれ。』

追伸：身体の修繕とかは自分でなんとかできるように設備は残していく、それでもだめなときは能登 源十郎とかいう人形師に頼め、困った妖怪とかを受け入れてくれるそうだとか言う話を古い知り合いから聞いたような気がせんでもない。』とか書かれていてですね……、

そうだつ！ 今 真つ先に思いついたんですけどその能登 源十郎だとかいう人形師、知りません。知らなかつたら捜すのを手伝って下さい。お願いしますよおおつ。今はあなただけがお願いなんですうつつ……」

おまわりさん現る その1

「そこまでだ。その男、そう お前だ。ゆっくりと立ちあがれ、不審な動きをするんじゃないぞ、両手をゆっくりと上にあげる。そしてすこしづつこちらを振り向け。よし、そのままにいるよ。お前を死体遺棄ならびに殺人容疑で逮捕する。詳しいことは署にいつてからだ」 慥然とした表情で黙りこんでいた彼に高圧的な声がかけられた。

「貴様には黙秘権とか弁護士を呼ぶ権利がある。ああ、いっぺんこのセリフ言ってみたかったんだ、僕」

「はずしてやれ」

銀製の立派とも言えなくもないアクセサリーをその手にかけられたところで、落ち着いた男の声がした。

「え、先輩ダメですよ。コイツは僕の手柄なんですから」 声の主に振り返りつつ男が不満そうに言う。

「そうじゃない、いいからよく見ろ」

「えーっと、その人連れていかれると非常にととてもとても私が困るなんですけど……」

能登 源十郎の両腕に手錠をかけた若い巡査はそこで硬直した。

なぜなら彼が死体と置いていた物体が彼に向かって泣きそうな顔でそう言ったからだ。

「能登 源十郎君、それは君の作品だな、いや、なにも言うんやない。君の作品だということにしる、それが唯一ワシ達と君がいる世界で共通の言語として役に立つんだよ。いや、この場合真実なんてものはどうだっていいんだよ源十郎君、ワシ達の事実をグラつかせるような真実なんてものはこの世にあっちゃんいけなんだ、なあ、戸川 現実との接点を持って生きていきたいんならコイツとその周

困と絶対に関わるんじゃない。いいな ワシ達は なーんにも見なかった。あの通報はどこかのドイツのいたずらでな、現場には何も無かったんだ。納得できないか、じゃあこうしようワシ達が見つけたのは ぼろ布のカタマリでそいつの下に生ゴミがあつて八工がたかつていた。だから第一発見者はこれを死体だと勘違いした。な、この暑さだものな。ちよいとドタマが接触不良を起こしてもしょうがないさあね。とな、そういうわけだ。いいか もう一度言うぞ、この仕事を続けていきたいんならこの男とその周囲と絶対に関わるんじゃない。いいな、ワシ達はワシ達の現実内で処理できる仕事しかしちゃいけないんだ。いいなわかつたなわかつたよな、わかつたなら帰ろうな。文句とかは帰ってからゆっくりとゆっくりと聞いてやる。だが、お前が知りたい真実とやらは教えてはやれんがな。な、ワシ達はワシ達が許容しえる範囲外の出来事は何一つ見もしなかつたし聞きもしなかつたし腐った肉の臭いなんてものは月曜のゴミ置き場にはつきものなんだ。いいな今日もワシ達の担当区域にはいつも以上の出来事なんてなかつたんだ」

おまわりさん現る その2

「…、わかり ました」

不満が顔にありありと出ていたが、初老にさしかかった先輩のただならぬ迫力におされてしびしびという形で戸川と呼ばれた巡査は源十郎の手にかけられた銀製のアクセサリーをはずした。

「ま、ありがとうとは言っておく」

「礼なぞいらんよ、関わりあいにならんのがお互いのためだといだけの ただ、それだけの話だ」

「ま、それでも恩は恩だからな」

それに対する答えは返ってはこず、二人は去っていった。

「うつつ、私、行く場所ないんですよおつ。私を哀れと思うなら拾ってやって下さいよおつ、私、私の身体を修繕してくれる人がいないと生きていけないですうつつ。って、もはや死んでるんですけどおつ。うつつ、このままでは わたしネズミの肉とかいつて売られちゃったりしちゃうよおつ、でも、賞味期限はとうの昔に切れているから食中毒なんか起こしたりなんかしてえ。きつと第一番目の被害者は能登 源十郎とかいう名前なんですうつつ!!」

必死の形相で脅迫めいた泣き落としを始めた彼女を見つめつつ、人形師 能登 源十郎と呼ばれた男は、どこか悟りきったような顔で、ただ深々とため息をついたのだった。

小夜子 居候となる その1

「お帰りなさいませ」

その一言を発したメイド服の人物をしばし眺めやるなり、黒髪の少女は思わず叫び声をあげた。

「私以外の女を連れ込むなんてっ、マスターの浮気者っ！」

「えーと、私、…小夜子と申しましてですね。生ける屍やってますですう。でもでも従来タイプと違って細胞全体が生きてたりするので”活ける屍”と呼んでやってください。って博士が言ってましたですう」

「マスターが屍姦野郎だっただなんて、そんなあっ！！ 私はいったいどうすればいいのよおっ！ 生ける人形に生ける屍になる方法なんてあつたかしら」

「えーと、れすねそれはそれは訳ありで本日、只今、今日よりこの家に居候させて頂くことになりました、どーぞよろしくですう。しかし源十郎さんって幼女愛好趣味な方だったんですね」といいつつ未だ上半身だけの小夜子さんは目の前の少女を眺めやる。

それは小学生とみまがうばかりの身長、発展途上の胸、成熟するはるか以前の形態を保ったままの堅さのみが強調されたような腰つき、極めつけは腰まであるつややかな黒髪を束ねるいやに自己主張の強いリボンが彼女の”少女”という形態を統括している。これで市内の高校の制服に身を包んでいなければとうていこれが高校生として生活しているとは信じがたい、いや彼女は年齢、数百年を生きた人形であるはずなのだが、その姿にはあるべきはずの年月の重みなど微塵も感じられない。そしてそれがまた少女然とした声で叫ぶ。

「マスター、源十郎様っ。いったい全体これはどういうことなんですかつ！！」

小夜子 居候となる その2

「えーとですね、それはそれはあるところにそれはそれは仲の良い恋人達がありました。男の名前は結城 博士、あだ名は博士、女の名前は浅野 小夜子、つまり生前の私というわけで、男の方は多少イっちゃってましたが、たで喰う虫もなんとやらで小夜子さんはその男にズツこん惚れ込んでいたそうです。

しかすっ！

もとい、しかしそんな彼らの幸福はそれほど長くは続きませんでした。それは神の嫉妬か、はたまた運命のいたずらか、べ、べん、べん！ べんっ！ ！ ある日、薄幸の美少女という形容詞のよく似合う、その実とっても健康優良児であらせられた小夜子さんは交通事故に遭われてしまわれました。即死であったそうです。結城さんは悲しみました。とつても、とつても悲しみました、悲しみのあまり普段はとんと整理もしない部屋の中を整理しました。えー、そりゃあ整理しましたとも三日三晩徹夜で、そしてあの”マグドウラム”とかいう秘法書の写本をみつけたのです。それが書かれたのはるか以前、落書きのような日本語でそれには確かに書かれておりました。そしてその秘法書にはなんとご都合主義な事に死体を蘇らせる術が載っていたのです」

「それでっ、それがあんたがここにいることと何の関連があんのよっ！！」

「それは…」

「それは？ んんっ？」

「それは聞くも涙、語るも涙のお話でありんす。半信半疑どころか零点五信九点五疑くらいで彼はその死体蘇生術なるものを試みまして。そして彼の施した死体蘇生術のおかげさまで小夜子さんは見事

に蘇りました！！ 結城むすぎさんは驚喜きんぎ乱舞らんぶしました。そりやあもう喜
びましたとも。彼女が目覚めるまでに二日、徹夜かわたで河内音頭おんどを踊っ
てしまわれたほどに。

しかし、悲劇はそれからだったので。蘇まった小夜子さよこさんの脳味
噌まはスカタコでした。それだけならまだしも生前の小夜子さよこさんの記
憶がズツポリと抜け落ちてシマっていたのです。結城むすぎさんはそれか
らありとあらゆる手を尽くして蘇まった小夜子さよこさんに元の記憶をとり
もどそうとガンバリました。どれくらいガンバったかというと三度
の飯よりも大好きな五食ごじきの飯を一日に三食に減らすぐらいにガンバ
りました。しかし悲劇はそれだけでは終わりまりませんでした。な
んと、あの純心でおしとやかで控えめな温室栽培おんじつそたぢな小夜子さよこさんは、
なんとっ！ 超がつくほどのどド淫乱いんらんになりあそばしてしまっただ
です！！

小夜子 やっかいものとなる

えーと、そりはなぜかと言うと生ける屍リビング・デッドの活動エネルギーの精気の摂取のためであるわけで、まあ別にその性行為さきょうかていを楽しんでなかったかというと、そりやまた嘘になるわけなんですけど、さてさて、そして二人はどうなったか、気になるところではございますが、べんべつ、べんつ！ 続きはまたのお楽しみということ…」

「またのお楽しみじゃないでしょっ！！」

「うつつ、頭グリグリしないでくださいよお、えーつとですね。ようするにあまりの超淫乱トさに文字通り精も魂も尽き果ててこのままじゃ自分の生命いのちがヤバイかなつ、と思つた結城博士ゆきひらに愛想尽かされて捨てられたところを源十郎げんじゅうろうさんに拾われたと、そういうわけですね。いーかげんに離してくださいさあーい。いたいですーっ！！」

「生ける屍リビング・デッドに痛覚なんてあるわけじゃないでしょっ！！」

「そんなことありませんって、そういう肉体を物理的に維持するための情報は再構築リプレイされるんですって、ほんつとにほんとに痛いんですってば」

「ま、そこらへんでやめておけ神無かんな、ようやくその周辺へんの修繕しゆしゆが終わったところなんだから、な」

「マスタあーっ！！」

*

「どーして、マスターは余計な者を拾つたりとかもらつたりとか押しつけられたりとかするんですかっ！！」

それが彼のよさだと認識わかしていながらも憤懣ふんまんやる方もないといった風情かん（ふう）で一神無と呼ばれた黒髪の少女が叫ぶ。

「…、すまん、な」言われたほうの男、長身瘦軀ちようしんてうくの丸眼鏡の男はさきほどから途切れもなく続く少女の不満を聞き流しつつ人体を縫

っていた。

能登のど 源十郎げんじゅうろうは人形師である。それも代々限りなく人間に近い人形かたしろを創つくることを目的とした人形師”源十郎”の名を継つぐ者である。そんな者かれにとつて生うける屍リビンケ・デッドを修繕する事など 何も無い所から人体と同じ人形からだを造り出す事つみだすにくらべればはるかに容易ましな作業ではある。

「ZZZZZZZZ……」縫ぬわれている人体ほんにん、小夜子さよこと名乗なった生うける屍リビンケ・デッドはその騒音さわぎの中、心地好よい眠りに入っていた。ときたま思い出したかのように寝言を言う彼女を目の当またりにすると”活いける屍”という呼称は確かに適あ当な気がしてくる。

「だいたいですねえ、源十郎様げんじゅうろうさまは お人が良よすぎるんです。今までだつて関わらなくていい騒動さわぎにどれだけ巻き込まれたと思おもつてるんですか…、その度に、マスターと私わたしとの甘美な時間がどれだけ浪な費いされたと思おもつているんですか」

「ZZZZZZ……」

「…、マスターの浮気者うきものつ！！」

いつも通りそれが神無かんなの最後の文句セリフだつた。

「さーつてとつ、それじゃそろそろ私も本格的に手伝てづつとしますね」

「ああ、頼たのむ」

「まーっ かせなさいっ！！」

「…、ところでこの娘こ、やたらと豊満バストな胸むねしてますね、…多少削くつておいといちゃダメですか？」

「……」

小夜子 ご恩返しを試みる

「ご恩返しをさせて下さいっ!!」

それが修繕なやまつたされたばかりの小夜子さよこさんの開口一番のセリフだった。

「で、何をやる気だ」なぜかメイド服すかたの彼女にそうすこまれて彼が返した言葉がそれだった。

「とりあえずは身体でっ! て事で」

「却下却下却下あーっ!」

「えー、だって私 他にお返すものなんて持ってないんですうっ、それにこの方法だと私の活動資源エネルギーの補給ほじゅうもできて源十郎様げんじゅうろうも楽しんで一石二鳥なんですうっ!」

「なーに考えてるのよっ! 源十郎様げんじゅうろうにはねえ神無わたしという立派な恋かの人がいるんですからねっ!」

「そう、なんですか?」

「神無かんなは、家族だ」

「源十郎様げんじゅうろうあーっ!」

「と、いうことでは勝負ですうっ! どちらが源十郎様げんじゅうろうにとって役に立つか勝負なんですうっ!!」

「ふっふっふっ、受けて立とうじゃないのこれで源十郎様げんじゅうろうに私のありがたさを骨の髄すいにまでしみ込ませてあげますっ!!」

「負けませんよっ!、これは私の死活問題なんですからっ!!」

「おい、神無かんな」と、呼びかける源十郎の声はもはや二人には届かないようだった。

それからの戦いは壮絶を極めた。

料理一番勝負で作られた小夜子さよこさんの料理の出来映けつえは本人の「ごめんなさああい、なんせ生リビング・デットける屍だから味とかわかんなくてえ、作るのは勘だけが頼りなんですうっ!」の一語に尽きる。

続ついての屋や内うち清きよ掃そうの顛てん末まつは「ごめんなさあいつ、なんせ生なまける屍しかばねだから力の加減かへんがわかんなくて」という小夜子およこさんの声こゑとともに屋外やぐわい清掃きよそうをやるハメに陥おちった。

結けつ論ろん、小夜子およこさんは何なにもしない方かたが有あ益やくである。

小夜子 ご恩返しを試みた

「ま、季節いしが夏で良かったな」すつかと風景が賑やかになったその場所ばしょで源十郎げんじゅうは空を見上げ 呑気に呟いた。

「マスター、いま お茶でも入れますね」

「ああ、頼む」

「ごごご、ごめんなさいいっ！！ わたしわたしいつもいっつも失敗ばかりで、うっっ」

「ま、気にすることでもないさ」

「うっっ、お優しいんですね、不覚にも惚れてしまいそうです」

「ごういうのは、日常茶飯事いちじょうちはんじだ」

「でもでもっ、これでは やっぱりお礼にならないですうっ、ここは私にできる唯一にして最大のご恩返しということでの身体を好きにしちゃって下さいいっ！！」

すぱかんっ！！

「ダメっ！ するなやるなっ脱ぐなっ！！ まったく人がちよつと目を離すとこれだもの。って アレ！？ なんか活動停止とまりしてません。…、わー、キヤーっ、私ってばもしかして人殺しっ？ うっ、源十郎様げんじゅう様 私達はちよつと遠くへ旅立たねばなりません。いざゆかん愛への逃避行っ！！」

「落ち着け、神無かんな」

「そーうーでーすーっ、ちよこーっ、こーとーぶ殴ーってくーれーまーせーんかあー、せえーっしょーくふりよーちよーいーと起こーしちやーった。みたいーですうううー」

「ちえーっ、せっかくの名演技がだ・い・な・しっ」

す、ぱぱぱぱぱ、ぱかんっ！！

「うー、どうもおおりがとついでいますですう、ときたま私の脳スレチャウなですに接触不良起こすんですううう」

「ま、それはいいとして どう？ 源十郎様もアンタも私の素晴らしさがわかったでしょ」

「ううっ、よーっくわかりましたなんですうう、骨の髄まで染み込んだんですう。と、いうわけで、とりあえず私が二号ってことで」

すっぱ、かーんっ！ー！

「もうちよっちよと活動停止カクドウテイジしていなさいっ！ー！

博士、登場してみる

「うつつ、ごめんよう。もう僕には君とうまくやっていく自信がないんだつ、ふがいのない僕を許しておくれえ、精力たiryくののない僕を許しておくれーつ、このままじゃあやせ細こって死んじゃうんだよお、可愛いがつてもらうんだよおつ僕の小夜子おー！つ！」人形師源十郎の屋敷いえから離れた高台で双眼鏡で小夜子達かれらの様子ことを覗いていた小柄な男ひとかけはそう泣きながら絶叫した。

「おまえが、結城博士だな」

「いいえ、まったくの人違いです！！」背後うしろから唐突ふいにかけられた声に結城博士は瞬時またたくまににさらさらつと嘘をついた。しかし、不幸な出来事は、男達の言葉は確認の必要とすらない質問とであったことであつた。

「結城博士だな」

「…」もう一度ゆつくりと眼前まへから問われ、彼は不承不承しかたなしに、頷いてみせた。彼の目には黒く光る銃身とつが映うつっていた。

「では、ご同道願ごどうげんおうか」

*

綺麗きれいだった。空には星の海が広がり、かすかな月が彼らを照らし出ひしていた。そこに不意に情緒ひといきを一ひと気に踏みにじる光彩ひかりが現れた。彼がその発生源おおもとに目をやると小夜子かのしよが発光ひかしていた。

「ああつ！！ 博士の危機なんですう」

頭こたまを叩たたかれた後、首から上だけがかるうじて自由になつた小夜子さよこさ

んの第一声がそれだった。

「この前、コソコソつと真夜中に博士の心臓に埋めておいた発信器が彼の心拍数の非常なまでの異常を訴えているのですっ！！ ええつと、ええつとですね。博士の身になにかあると実際に私の死活問題なんで、最前、博士が永眠したかのように熟睡の折りにシユジュチユしておいたのが役に立ってみました。ちなみに危ういところで永眠させかけましたけれど、そんなときはそんなときで二人で腐れた仲になればいいだけの話、……、三、二い、一、びーむうっ！！」最後の言葉と同時に彼女の身体から光線が飛び出し、ある一カ所を指し示す。

「では、長らくお世話になりましたです。私は博士を助けに行きまですすう！！」炎の決意をその瞳に宿し、なぜか、なんとなく自由を取り戻した彼女はそう言って立ち去って行った。

彼女が去った後、しばらく、彼は、呆と空を見続けた。

「準備できましたあ、では、行きましょう。御主人様」そこに神無の威勢の良い声がかかる。その言葉には一片の揺るぎもない、彼がそうするのがさも当然のごとくに神無は彼の側に立って居た。

「神無もたいがい……」それだけを彼は口の端にのせた。

不死の夢

「わかつているんですか!?!、不老不死とは”世界”の摂理に反する出来事です。それは人間として存在する以上、望んではいけないことなんです!?!」

博士は目の前に鎮座する老人相手に熱弁を振るっていた。屈強な男達に囲まれていながらもそこに怯んだ様子がかけらも見あたらぬのは弁舌に夢中になると周囲の事情が見えなくなるタイプだからだろう、と男達はそれを強者の余裕を持って受け止めた。

「結城 小夜子」

「そりゃああつ、もつち論。あれに懲りに懲りて今度こそ死なない彼女が欲しいかなあつとちよこちよこつと思っただけじゃないですかあ、実践して何が悪いんですか!?! ちなみに本当に生き返ったというのはわりと予想外の出来事でした。まあ、それはともかくよく言うじゃないですか、嫁は丈夫な子に限るって」老人がボソリと漏らした言葉にも博士は微塵の迷いもなく自説を展開した。

「…、やれやれ、話にならない、貴様には選択権など始めからないという事をいかげんに認識したまえ」言つと老人は一点を指さし、彼に見るようにと命令した。

「すいませええーん、博士つ、捕まってしまいましたなんですかうう、Living Deadだからなんとかなるかも、とも思われたのですが、やはり基本性能の差はいかんともしがたかったですね。結論! やっぱ、死なないだけじゃダメでしたあああああつ!?!」老人が指さした先の画面で、縄でぐるぐる巻きにされた小夜子さん

が、いまいち緊迫感キンチョウのない事をのたまわった。

「では、最愛の彼女の細胞の一かけらまでも研究対象として我々に提供するか、自ら進んで私に不老不死の秘術を授けるか好きな方を選びたまえ、だいたい貴様があの秘法書を処分しなければお互いこのような無駄な手間をかけずにすんだのだ」

「…わかりました。では、一度、いっぺん死んで下さい」

彼がそう言った瞬間、殺意が銃口にのせられて博士かれにのしかかる。

不死への夢

「…、う、ああああ、ちよっとまってください撃たないでください、ちよこちよこつと待つて僕の話聞いてください、秘法書”まぐどらむ”には死体に生命を吹き込み甦らせる方法しか載^のっていないなかつたんです。生者^{せいじや}を生きながら不死にする方法は未だ”世界”にはありません。あの秘法書に記載^のされている方法は一度死んだという事を”世界”自体に認識させる事で”世界”を欺^{だま}むからです。理解^{わか}して下さいってば、だから”お願いですから、一度死^{いっ}んで下さい”っていったのは必要な手順^{コト}で、最大重要事項なんですってば！

「…、三日やる。その間にそれ以外の方法を考えたまえ」苦虫を噛みつぶしたような声音^{こわね}で老人は最後通牒^{つうちよう}を突きつけた。

「ちよ、ちよーっと、待つて下さい。せめて半年、いや、一年以上時間を下さいよ」返答は無言と銃口^こだった。

「…、わかりました。では、せめて小夜子^{かのじよ}に会わせて下さい」観念して、博士^{カレ}はそう言った。

*

再会はガラス越しだった。これでは逃げる事もできないな、となんとかして逃げ出す方法を算段^{かんがえ}中であつた博士^{カレ}は思った。しかし、どうやって最初の一声^{こえ}をかければ良いのだろう。なにせ自分は彼女を文字通り捨ててしまった男なのだ。

「ああっ！？ 博士お元気でしたかあ、たった半日あわないだけで

ずいぶんと血色もよろしくなったようで、ゴハンちゃんと食べてますかあ、ゴミの日は間違えると近所のオバサン方が大挙して押し寄せやってくるよ、近所迷惑ですよ、だからって知り合いの科学者のように無断で半機械化して従順化しちゃダメなんですよ」

悩む間もなく、喜色満面といった様子で小夜子は彼にいつものように話しかけてくる。

「小夜子…」

感染(うつ)るんです

「小夜子…」

「感動のご対面は、そろそろ終わりにしてもらおうか、なにせお互い時間の無い身であるからな」無粋な声が博士を実行力を持つてその場から連れ去ろうとする。

「あー、ところで博士、”感動の対面、またまた冷たく愛し合う二人は引き離されるのね。泪、涙だわ私”の所、申し訳ないんですが、わたくし今、とあーっても重要な事を思い出しましたんですけどお…」

「な、なに？」珍しく真剣な表情の小夜子に嫌な予感(あせ)を一疾らせながら彼は、つとめて自分では平静を装ったつもりで尋ね返す。

「すみませーん、博士。私、今日お薬飲むの、ズツバツコーんつと忘れていてしまいましたあ」

*

明るく言い放った小夜子とは対照的にみるみると結城博士の顔が青ざめ「だからあれほど言っておいたのに…」後悔と諦念のないまぜになった声で呟いた。

「最悪の事態が発生しつつあります。全部の入り口を封鎖して、換気も止めて下さい、これ以上被害が広がらないためにもそうすべきです。まだまともな思考が保たれている間に…」

「説明しろ、どういう事だ」自分の立場をわきまえていないと思われる結城博士の命令にとりあえずは従った男が、銃口を突きつけながら尋く

「飴でもどうですか、落ち着きますよ」まるで、銃口など始めからそこに存在しないかのように博士は先ほどまでの蒼白な顔とは違って変わって自由に振る舞いだした。

「……」男は無言、効果を未だ持つのかどうか解らぬ銃口を男に突きつけたまま。

「無駄ですよ、いくらそんなものを突きつけられた所で今の僕には無駄ですよ、おや、不思議そうな顔をしていますね。では、飴は僕がいただくとして、現在、起こりつつある事態の解説を始めましょう、秘法書”まぐどうらむ”による死に返りの法には二つの重大な欠陥があるんです。一つ目、あの秘法書どおりに黄泉（よみ）「還りの法を行うと全くの思考能力を持たない西洋で言うところのZombieがホイサツサつとできあがり、そこをなんとかあそこまでにしたのが僕の腕というわけで、その成果が先ほどあなたが拒否されたアメ玉にと詰め込まれております。ちなみにこのアメ玉にはもう一つの欠陥を押さえる成分も含まれております。でも、喜んで下さい、あなた方の望むところの不老不死は叶えられつつあります」

「どういう事だ」どこかサバサバとした様子で語る博士に不審を抱き男が問いつめる。

「つまり」

「つまりい、私^{わたし}つてば空気^{くわい}感染^{かん}するんですよ」「捕^{とら}まえられたまんまの彼女はなぜかにつこりと微笑^{わら}んでこつ言い放^{はな}つた。

マギ・ドラマ

気づけば、自分の肉体の表面がカビのような茶色い物体に覆われるようにして変色してゆき、ぐずぐずと腐臭を吐き出していく、恐慌状態に陥いつた男達の一人が彼女に向けて引き金を引いた。そして彼女の肉片が飛び散り、近くにいた男達に付着する。悪夢のような連鎖反応が続きその場にいた男達のだれもがその場にくずおれていた。「ヒイ、くるなあ、こつちへくるなあ、銃は使うなあ、うわあああ、飛び散るううつ!!」

阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄絵図が展開され、全ての男達が倒れ伏した中に一人の男がゆっくりと現れる。そして、小夜子の身体からだに無造作にその手を埋没させるとその身体なかから一つ目の不格好な人形を取り出すと、ぼそりと言った。「幻灯人形げんとう 多事見たじみ、さすがに五感を伴う幻覚は強烈だろう」

「君が、源十郎君か、助けてくれた事には礼を言うが、早くこの場を去りたまえ、感染うつするぞ」入って来た長身瘦躯うつつのその男を見もせず博士は言う。

「心配ない、あの秘法書は一族うちから流出したものだ」

「そうか、という事は」ため息をつきつつ博士カレが見上げるようにしてその男に尋ねる。

「処置そくさ、しておいた」小夜子さんの肉体を修繕なおししながら、極めて無表情むに青年カレは答える。

「彼女と一緒にの生を歩むことを先程決心したばかりだが、正直な話、

自分が小夜子あまのひなこのようになくて良いと知って、ホツとしている「彼に
というよりも独白するように博士かは言った。

「御主人様マスターつ、こっちの処置終わりましたあ」言っつて一人の黒髪の
少女が青年の側にと駆けよつてくる。

「なるほど、これが神無かんなか、彼女に使われている秘術モノを小夜子かのじよに使
わせてくれと言つても無駄、なのだろうな……」羨望の眼差しで一人
の男が創り上げた生き人形リビング・ドールを見つめる。

「神無かんながここに存在あという業しをのぞく気があるのなら、考えても良
い」答えは希望を含む絶望で返された。

「……やめておくよ、」Magi Drumマジック・ドラムですら僕の手には余る「
源十郎の顔をしばし覗き込み、博士はあきらめたようにそう弱く笑
つた。」

君に永遠の愛を

「気分は」

「…あ？」まどろみの中、老人はここ数十年出した事のない間拔けな声を目の前の青年に向けて発してしまった。この無礼な若者を一喝しようとしたが声がでない、いや、声ばかりか、身体にくたいの自由も利かない、恐怖が彼の思考を支配した。

「人形師 源十郎、それほどまでに望むのであれば、不老不死の秘技、その身に授けてやるう。もともとあれは我が一族から流出したもの。人という器を捨て去る気があるのならば、だがな…」

青年おとこの発した言葉がゆっくりと老人の脳裏のうりに浸透しみわたってしてゆく。彼はただ黙ってうなずいた。たとえそれが悪魔に魂を売る事と同義だとしても彼は構わないと思った。妙にぼやけた視界の中、彼は頷いていた。

次に目覚めたとき『秘法書、Magi Drum、人の魂を人形かたしろへと移す法すべ、そして人形は人形の法に縛られる(したがう)もの。その法に縛られ永劫に生き長らえるが良い』その声が脳裏に響き渡ると同時、男達は自分たちの望みが不完全ながらも叶えられた事を知った。

*

「そうか、という事は彼女は”小夜子”ではないのか」ため息と、やはり、という思いがないまぜになった表情で博士かれは彼女を見つめる。

「残念ながら、な。死んだ者は二度とは還^{かえ}らぬよ」

「えーと、という事はわたしは一体誰なんでしょうか？」と見つめられた彼女は小首を傾げながら問う。

「小夜子、さ」

「…なあ、小夜子、…なんで助けに来たんだ。僕は君を文字通りに捨てたんだぞ、それなのに…」、「源十郎のその言葉^{ことば}に何かを決心して博士は小夜子^{こやし}を見つめる。

「だって私、脳ミソカスカスな女ですから そんな事、忘れちゃってしまっていましたあ」

「…すまない、僕が間違っていた。君はもはや僕の愛した小夜子ではないけれど、今ここで、あらためて君に僕は永遠の愛を誓^{ちか}う！！」

余

私は考えました。源十郎様の『神無は』家族だという例の一言です。そうですね、あのときは冷静さを失ってしまっていました。よくよく考えてみれば家族というものはある意味恋人なんかよりも深い深い繋がりを持つ者同士です。恋人は別れてしまえばただの他人ですが、家族は遠く離れていてさえいてもしつかりとした繋がり、糸を持つ者同士の事です。そして初代、人形師 源十郎に創られた私が家族ということは、つまりこれが何を意味するかと言えば、つまり私は源十郎様の妻だと言うことです。普段なにかと憎んではかりの初代 源十郎の事も今の源十郎さまに出逢うために自分が生まれて来たのだと思えば許せそうだった。「と、いうことで今日は、うるさいのもいなくなりましたことですし、ようやく屋敷で久々にふたりつきりになりました。というわけで妻としてのつとめを果たしにいかねばなりません。いざゆかん、愛の、…」言つて源十郎の寢室の扉をあけ、彼の元へと飛び込もうとして、神無の身体が目の前でまさにいまからコトに及ばんとしているもう一人の存在を認めて凍りつく。

「えーと、ですね、つまり、なんていうか、あれから二人は激しく愛しあつたりしたなのわけですが、やっぱり博士の体力が持たなかつたりなんかしたわけなので、で博士と二人の今後を相談したその結果、精力のある若者に協力していただくことにしましょうとあいなつたわけなんです。その人物は馬乗りになって男の着衣を引っぱがしながらのほほんとそう言い放った。

「なんで源十郎様なわけ、精力だけがあり余っている若者なんて、巷にゴロゴロと溢れかえっているでしょうが、返答と次第によつては細胞の一片まで燃やし尽くすわよ」自分の衣服を脱ぎ捨てつつ器

用に源十郎を押さえ込んでいる小夜子を睨みすえつつ神無が問いつめる。

「その理由は単純明快です。欠陥持ちの活きている死体の私を安心して任ぜられる御方（おかた）——等博士以外には源十郎様しか見つからなかったからです。とりあえずは見知らぬ他人よりは知っている他人とそういうことなんです。あと、博士の言によると『秘法書』まぐどうらむ』、使ったのは私、流出させたのはそちら、そのぶんの責任は分担しようじゃないか、わははははは』だそうです。と、そのようなわけで当初の予定通り私が二号とそういう事で、……ちなみに当然、博士公認です。あーとーはー、私のような娘を相手にしてくれる殿方など博士の他には源十郎様しか私には思いつかなかったものですから、……ぽっ 《青面》」

「いやあああつ、聞きたくないいいいいいっ！！」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4465c/>

君に永遠の愛を - 人形師 源十郎 -

2009年3月24日10時25分発行